

化学合成二枚貝フクスケツキガイと横浜市に分布する中部更新統野島層から産出するツキガイ類化石の比較

Comparison between chemosynthetic bivalve *Mesolinga soliditesta* and lucinids from the Pleistocene Nojima Fm. in Yokohama City

中島 礼 [1]; 大竹 望 [2]; 間嶋 隆一 [3]; 藤倉 克則 [4]

Rei Nakashima[1]; Nozomi Otake[2]; Ryuichi Majima[3]; Katsunori Fujikura[4]

[1] 産総研・地質情報; [2] 横国大・環境情報; [3] 横浜国大・教育人間; [4] 海洋機構・生物圏

[1] GSJ, AIST; [2] EdHS, Yokohama Natn. Univ.; [3] EdHS, Yokohama Natn. Univ.; [4] XBR, JAMSTEC

フクスケツキガイ (*Mesolinga soliditesta* Okutani & Hashimoto) は遠州灘金州の瀬水深 280m における冷湧水環境から報告された化学合成二枚貝類である。この種はこれまで、ほかの冷湧水環境や化石記録としても知られていなかった。しかし、かねてより、横浜市南部に分布する中部更新統野島層から産出するツキガイ類との類似性が指摘されていた。そこで本研究では、フクスケツキガイと野島層産ツキガイ類と殻形態および殻構造の比較を行ったのでここに報告する。殻形態の比較として、殻内面および外面の観察、殻サイズの計測を行った。殻構造の比較には、レプリカフィルムによる殻層構造および SEM による構築構造の観察を行った。検討した貝類試料は、金州の瀬産の現生タイプ標本 (ホロタイプ, パラタイプ, トポタイプ), 野島層産ツキガイ化石 (大道中標本), 野島層産カマクラツキガイモドキ (*Lucinoma kamakurensis* Baba) のホロタイプである。

殻構造としては、タイプ標本および大道中標本ともに類似した構造を持っており、外層には平板状球晶構造、中層には交差板構造、内層には不規則稜柱構造が観察された。また、老成すると殻の膨らみを増す方向に殻縁辺部の外層と中層の厚みが増し、成長障害輪が目立つ特徴がみられた。殻形態については、タイプ標本および大道中標本ともに成長とともに殻長/殻高比が小さくなり、殻幅/殻高比が大きくなることがわかった。貝殻表面はともに同心円状の細肋が発達し、一般のツキガイモドキ類にみられる板状肋は目立たない。板はともに重厚であり、歯の特徴も類似するが、大道中標本左殻の前側歯は上下 2 本あるが、タイプ標本左殻の前側歯はこぶ状のものが 1 本という違いがみられた。以上の貝殻の特徴より、大道中標本はフクスケツキガイのタイプ標本と類似しており、同種である可能性が高い。一方、カマクラツキガイモドキについては、殻後背縁がとがる、殻表面に板状肋が目立つ、後主歯が低角であること、などからフクスケツキガイや大道中標本とは異なる可能性が高い。